

坂 尻 遺 跡

—平成3年度貸倉庫建設に伴う緊急発掘調査概報—

1 9 9 2

静岡県袋井市教育委員会

例 言

- 1 本書は、袋井市教育委員会が行った坂尻遺跡発掘調査概報—平成3年度貸倉庫建設に伴う緊急発掘調査概報—である。
- 2 調査は加藤理文（袋井市教育委員会社会教育課）を発掘担当者として、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
- 3 本書の執筆・編集は加藤が行った。出土遺物については、吉岡伸夫（袋井市教育委員会）が執筆した。掲載した挿図は、吉岡、加藤が、トレースは、早川保子（袋井市教育委員会）、加藤が行った。
- 4 本発掘調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。
- 5 調査及び本概報の発刊に係わる事務は、袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が担当した。
- 6 本概報を作成するにあたり、以下の人々の協力を得ました。（敬称略）
小柴秀樹、篠原修二、柴田 稔、平野吾郎、前田庄一、戸塚和英

目 次

1 調査にいたる経過	1
2 立 地	2
3 発掘調査の方法・経過・調査整理体制	2
4 遺跡の周辺環境	4
5 基 本 層 位	4
6 古墳時代の遺構	5
7 奈良時代の遺構	14
8 平安時代の遺構	17
9 出 土 遺 物	17
10 ま と め	27

挿 図 目 次

第1図 板瓦遺跡位置図	1
第2図 板瓦遺跡 周辺地形図 発掘調査地点	2
第3図 基本層位図	5
第4図 第一面全体図	7
第5図 第二面全体図	9
第6図 1・2・3号作后実測図	11
第7図 4・5号作后実測図	12
第8図 1・2号掘立実測図	13
第9図 3・4号掘立実測図	15
第10図 5・6号掘立実測図	16
第11図 7号掘立実測図	17
第12図 1・2・3・4号竪穴出土土器実測図	19
第13図 1・2・3・4・5号竪穴 1号掘立出土土器実測図	20
第14図 1号掘立 2号溝出土土器実測図	21
第15図 2号溝 3号溝出土土器実測図	23
第16図 3号溝出土土器実測図	24
第17図 3号溝出土土器実測図	25
第18図 3号溝 2・3・4号竪穴 その他の遺構 包含層出土土器実測図	26
第19図 奈良時代発掘調査域概略図	28

圖 版 目 次

- 圖版 1 第 1 面完掘狀況 第 2 面完掘狀況
圖版 2 2・3・4・5 号竪穴住居 2・3 号竪穴住居
圖版 3 4・5 号竪穴住居 1 号掘立柱建物
圖版 4 5 号掘立柱建物 1 号竪穴住居 2・6 号掘立柱建物
圖版 5 3・7 号掘立柱建物 1 号掘立 P 7 礎板検出状況
圖版 6 出土遺物

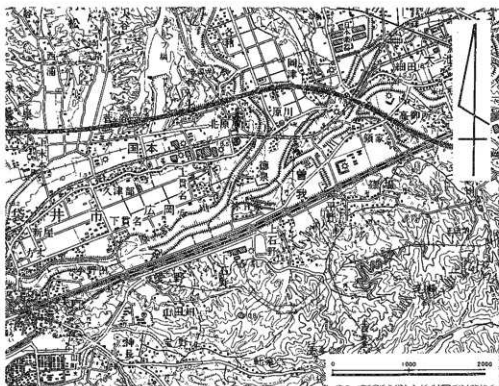
平成3年度坂尻遺跡発掘調査概報

1 調査にいたる経過

坂尻遺跡範囲内で、貸倉庫建設の計画があるため発掘調査を実施してほしいとの連絡を地主萩田誠一氏よりいただいたのは平成2年2月のことであった。袋井市教育委員会はさっそく計画地を確認した。奈良時代の遺構群（佐野郡衙）の中心域に推定される範囲であったため、地主萩田誠一氏と協議を重ね、年度明けの早い時期に対応することで双方が了承した。

昭和65年より5年間にわたる国道1号線袋井バイパス建設に伴う発掘調査や2万平方メートルに及ぶ大和ハウス中部工場建設に伴う発掘調査等坂尻遺跡関連の調査が成果をおさめ、大量の墨書土器が話題になったり、佐野郡衙が新聞紙上を賑わすなど坂尻遺跡の重要性が地元に通じている。そのため、地元国本では坂尻遺跡に対する理解が非常に深い。

今回、事前に地主萩田誠一氏から連絡があり、スムーズに協議が進んだのも坂尻遺跡に対する理解と厚い恩情によるものである。こうした地元の人たちの理解と協力により、坂尻遺跡周辺の様子がおぼろげながら姿をあらわしてきた。一日でも早く全容が解明され、袋井の歴史の上で果たした役割りを地元の人たちに見てもらいたい。



第1図 坂尻遺跡位置図

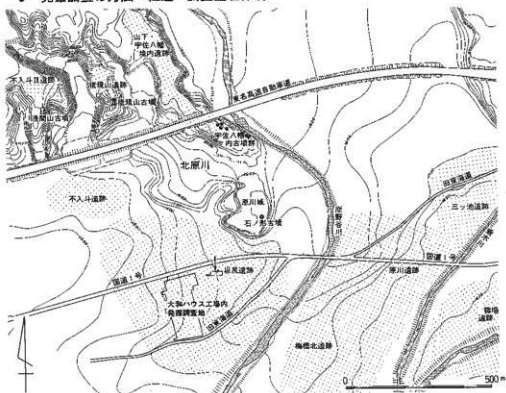
2 立 地

遠く赤石山系に源を発し南流する原野谷川は、小笠山丘陵にぶつかって河道を西へ転ずる。この河道転換点付近は、西流してきた逆川・垂木川が近接し、合流する地点でもある。

坂尻遺跡は原野谷川の河道転換点西側に形成された自然堤防上から西側緩斜面（標高15～17.5m）にかけて立地する。自然堤防は北に迫った丘陵末端へ連続し、後背低地との比高差は平均3mである。現在確認されている遺跡範囲は約15haと広大で、奈良時代の遺構群は南東半分約6haに及んでいる。今回の発掘調査地点はこの奈良時代遺構分布のほぼ中心に位置している。

原野谷川・逆川・垂木川が形成した自然堤防上に初めて人々が住みついたのは弥生時代中期と考えられる（原川遺跡）。後期にいたり、集落致（国本Ⅱ・梅橋北・三ツ池・曾我領家遺跡）は増加する。坂尻遺跡では古墳時代前期に集落が成立し、後期初頃になるとその規模は西方へ拡大する。この集落拡大期と軌を一にして、北方丘陵の縁辺部にも小規模な集落（不入斗・石ノ形遺跡）が営まれるようになる。後期後半には坂尻遺跡に、周溝を持ち孤立柱建物为主体とする拠点集落が成立し、それを取り囲むように堅穴住居群致単位からなる小集落が分布する。坂尻遺跡はこれら古墳時代後期の遺跡群のほぼ中央に位置し、表面採集が可能な遺物の分布範囲は著しく広い。

3 発掘調査の方法・経過・調査整体制



第2図 坂尻遺跡 周辺地形図 発掘調査地点

i) 方法

発掘調査区に一边10mの方形グリット（大グリット）を設定した。グリットは、昭和63年度に静岡県埋蔵文化財調査研究所（袋井バイパス）、平成元年度に袋井市教育委員会（大和ハウス中部工場）が設定したものを基本とした。従って今回の発掘調査地点は、その続き番号を使用した。さらに大グリットを4分割（一边5m）して小グリットとした（北西—南西—北東—南東の順にa・b・c・d区と呼んだ）。分層発掘・掘り下げは大グリット単位で行い、小グリットは包含層出土物の取り上げ、現地図面作成等の基本単位である。

遺構は検出順に001・002・・・（柱穴遺構はP1・P2・・・）と通し番号を付して呼び、各検出面ごとに100分の1縮尺の略側図を作成して、出土遺物を混同しないよう努めた。

現地平面図・断面図は20分の1縮尺を基本とし、遺物の出土状態等詳細な図面が必要な場合は、10分の1縮尺図を作成した。

記録写真はブローニーサイズ原画（黒白）と35mmサイズ原画（黒白・カラーリバーサル）を併用した。

ii) 経過

8月20日～21日 発掘区を設定後、重機により耕作土を除去する。発掘調査地が低地のため2ヶ所に集水弁をもうける。

9月1日～6日 大グリット単位で遺構確認作業を行う。発掘区東側で溝、西側で柱穴列が検出される。

9月9日～12日 一面の遺構発掘終了。写真撮影、実測作業に移る。

9月13日～20日 台風が続く様に2回上陸。発掘区が水没し、作業再開のめどもたらず、発掘作業日程の見直しも検討する。

9月24日～27日 11日より作業再開。Ⅲa層の掘り下げを開始するも、西側半分が砂利混じりの粘上層のため作業が困難をきわめる。

9月30日～10月4日 奈良時代と思われる掘立柱建物が2棟検出される。西側に、住居跡と思われる箇所が重なって検出される。

10月7日～13日 一週間にわたり雨が降り続く。発掘区が徐々に水没していくのがわかる。

10月14日～18日 遺構検出が終了し、遺構発掘を開始。東半分はスムーズに進むが、西側すみで検出された溝の発掘に手間取る。掘立柱建物、住居跡、溝が重複するため発掘作業のベースが落ちる。18日、完掘。写真撮影。

10月21日 全体図を作成。図面終了後、電の切断、住居跡出土土器の取り上げ、掘立柱建物の礎板の取り上げを順次行なう。

10月22日 遺物取り上げ作業と平行して、発掘用具・資財の片付けを行ない現地発掘作業の全てを終了する。

iii) 調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 浅井通男

社会教育課長 岩崎 保

文化振興係長 小粥保夫

主 任 主 査 吉岡伸夫

主 任 学 芸 員 永井義博 加藤理文（発掘担当者＝静岡県教育委員会文化課）

松井一明

学 芸 員 森井雅彦 白澤 崇

主 任 主 事 健部千代子

鈴木寿美子

調 査 員 早川保子

発掘作業員 大原正作 加藤博司 杉山兼一 鈴木健三 鈴木彰二 中川栄

古 平出範吉 三浦久雄 諸井貞平 山崎莊一 安間しげ子

石川はな 鈴木きみ子 寺田しま 戸倉みつ子 永田のぶ江

早川里美 三浦とく江 山崎雪江 山崎好江 山本はつ江

資料整理員 住谷止子 北島淳子

4 遺跡の周辺環境

坂尻遺跡の歴史的、地理的環境については、過去の報告書・概報等でくわしく説明されているので、ここでは古墳時代の周辺遺跡との係わり合いについて簡単に述べたい。

坂尻遺跡の立地する自然堤防と原野谷川を挟んで東崖に位置する掛川市原川遺跡は、6世紀初頭～7世紀前期までの長期間営まれた集落である。原川遺跡の南へ隣接し同一の自然堤防上に梅橋北遺跡がある。6世紀後半～7世紀前半の遺物が出土している。原川遺跡、梅橋北遺跡、坂尻遺跡は連続して一つの集落を形成していた時期があったと考えるのが妥当ではないだろうか。

坂尻遺跡は、4～7世紀までの長い期間集落が存続し、遺物、遺構とも豊富に出現している。集落は、5世紀と6世紀の間に安定し、6世紀後半に飛躍的に遺物量が増大する。こうしたことから坂尻遺跡を中心集落にし、6世紀前半から原川遺跡、梅橋北遺跡と集落の拡大があったと考えたい。この原因は、自然環境ばかりではなく、各集落内の労働力の増大、技術革新による生産量の増加、安定に加え、身分制度による社会的変革によるものと考えられる。

5 基本層位

坂尻遺跡の基本層位については、すでに各報告書で触れられている。本調査地点でも同一の様相を示すが若干異なる点もあるため、それらを中心に記述したい。

Ⅰ 層 現耕作土と旧耕作土とに分別される箇所と交ざり合った箇所が見られる。層厚20～

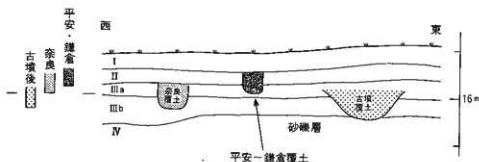
30cm、暗灰色粘土。

Ⅱ 層 酸化鉄・マンガン粒混じりの灰色粘土。層厚約20cm、古墳・奈良時代の遺物も若干交じりますが、基本的には平安時代遺構の遺物包含層・遺構覆土。発掘区東側では、多量の川砂利が混ざり込み、中世の一時期原野谷川の氾濫があった可能性もある。

Ⅲ a層 マンガン粒を多量に含んだ暗褐色粘土層。層厚20～40cm、上部より奈良時代の遺構が、中位より古墳時代前期の遺構が掘り込まれている。遺物の包含量が顕著。

Ⅲ b層 マンガン粒をあまり含まない褐色砂質粘土層。層厚20～50cm、多くの遺構がこの層を掘り下げた後検出される。

Ⅳ 層 砂礫層。古名栗川の自然堤防の一部と考えられる。



第3図 基本層位図（発掘区東西ライン）

6 古墳時代の遺構

平成3年度の発掘調査により検出された古墳時代の遺構には、竪穴住居5棟、掘立柱建物4棟の他、多くの溝・柱穴等がある。

i) 竪穴住居

1号住居（第6図） 東西幅4.5m 南北幅4.0m以上 検出面からの深さ15～20cm 平面方形 方位＝北－22度－東をなす。4主柱構造と考えられ、北壁のほぼ中央部に竈を築いている。北壁東半分のにみ壁溝が見られる。Ⅲ a層を覆土としている。南端は、調査区外にあり未発掘。3号掘立柱建物の底部分と重複している。出土土器には、須恵器坏蓋・坏身、土師器高坏がある。奈良初頭の須恵器坏蓋（6）もあるが、重複する掘立柱建物の混ざり込みの考え、6世紀前半に位置付けたい。

2号住居（第6図） 東西幅6.8m 南北幅6.0m以上 検出面からの深さ15～20cm 平面方形 方位＝北－2度5分－東をなす。4主柱構造と考えられ、北壁のほぼ中央部に竈を築く。壁溝

は見られない。Ⅲ a 層を覆土とし、3号住居、4号住居に切断されている。南は調査区外にあり未発掘。1号掘立柱建物と重複している。出土土器には、須恵器坏蓋・坏身、土師器坏蓋・坏身・高坏・長頸壺・甕がある。ミニチュア壺・坏が出土している。時期的には、6世紀前半、後半、奈良初頭期までであるが、1号住居同様、6世紀前半に位置付けたい。

3号住居(第6図) 東西幅5.4m 南北幅4.3m以上 検出面からの深さ20~25cm 平面方形 方位=北-5度5分-西をなす。4主柱構造と考えられ、北壁のほぼ中央部に竈を築く。竈は、11の小穴で囲まれている、用途不明。壁溝は見られない。Ⅲ a 層を覆土とし、2号住居、4号住居を切断している。南端は調査区外にあり未発掘。1号掘立柱建物と重複している。出土土器には、須恵器坏蓋・坏身、土師器坏蓋・坏身・高坏・長頸壺・甕がある。奈良初頭期のものを、重複する掘立柱建物の混ざり込みと考え、6世紀前半に位置付けたい。

4号住居(第7図) 東西幅5.9m 南北幅4.9m 検出面からの深さ15~25cm 平面方形 方位=北-2度5分-東をなす。4主柱構造と考えられ、北壁のほぼ中央部に竈を築く。竈は11の小穴で囲まれている、用途不明。壁溝は見られない。Ⅲ a 層を覆土とし、5号住居を切断している。北東角に炭化物を多量に含んだ厚い包含層があった。1号掘立柱建物と重複している。出土土器には、須恵器坏蓋・坏身、土師器坏蓋・坏身・高坏・長頸壺・甕、土師器皿・甕がある。ミニチュア壺が出土している。大型の掘立柱建物の混ざり込みを考慮に入れ、6世紀前半に位置付けたい。

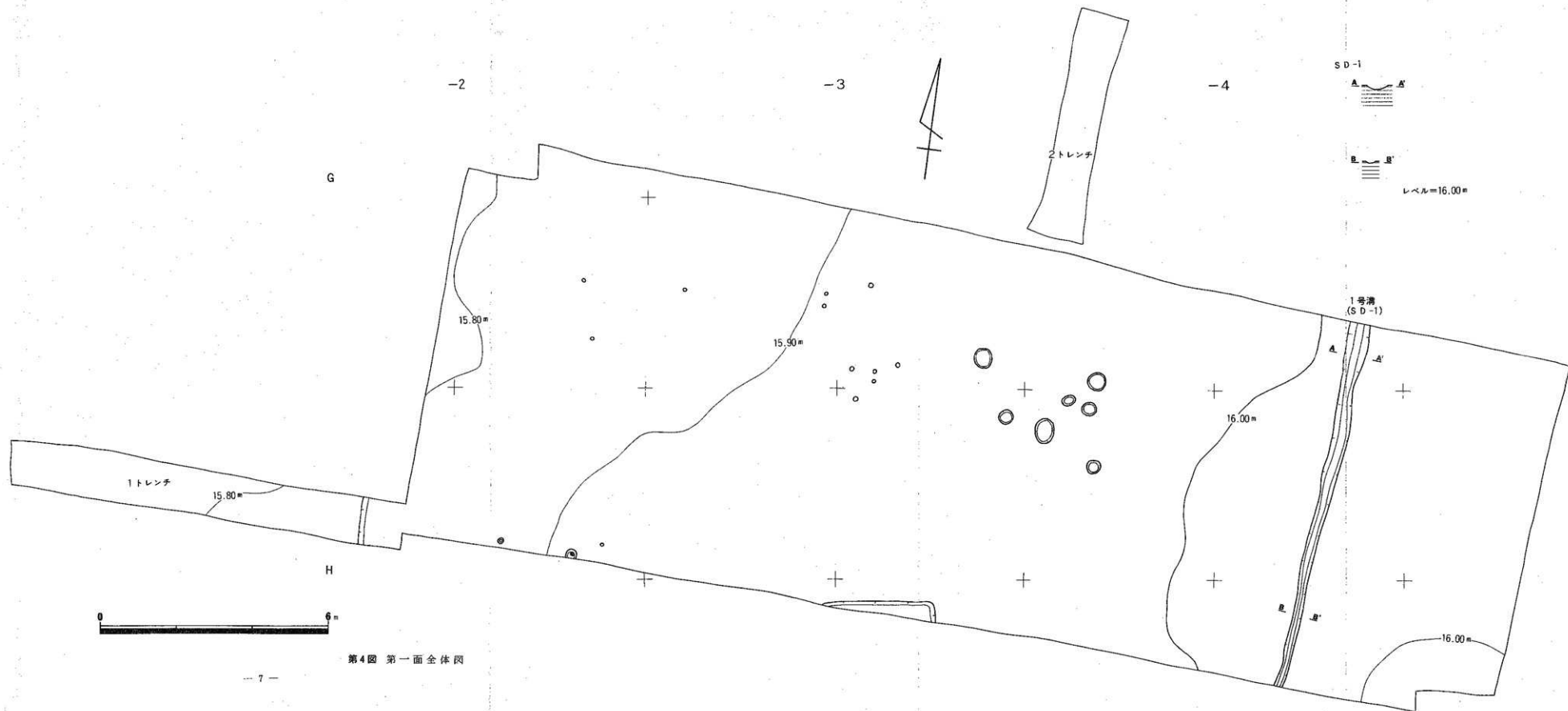
5号住居(第7図) 東西幅3.0m以上 南北幅4.5m 検出面からの深さ20~25cm 平面方形 方位=北-1度5分-東をなす。4主柱構造と考えられ、北壁のほぼ中央部に竈を築く。壁溝は見られない、Ⅲ a 層を覆土とし、4号住居と、溝状遺構SD3に切断されている。1号掘立柱建物と重複している。出土土器には、須恵器坏蓋・坏身・長頸壺・甕、土師器皿・甕がある。4号住居同様、6世紀前半に位置付けたい。

ii) 掘立柱建物

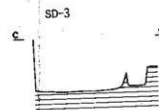
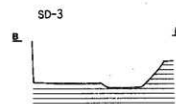
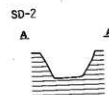
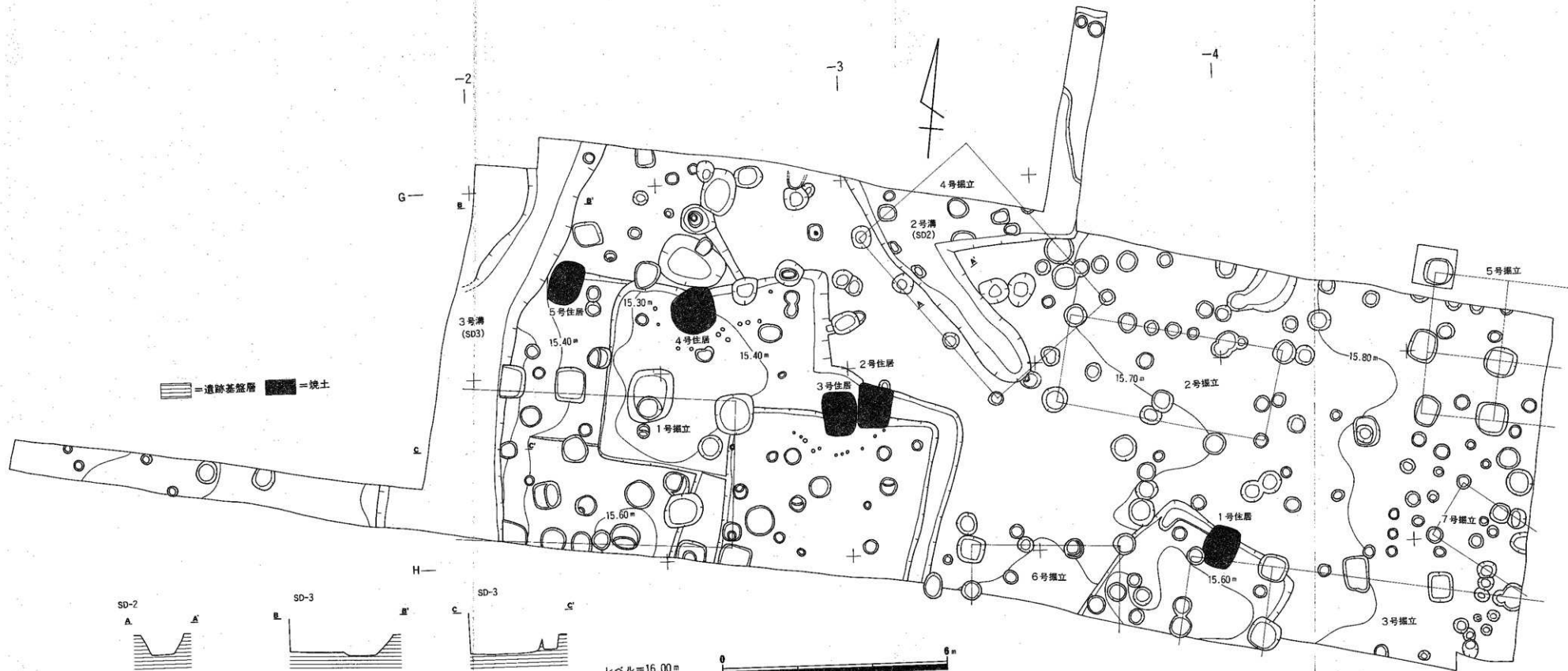
2号掘立(第8図) 東西列5.7m 南北列2.5m 間口規模は4軒×2軒と考えられる。主軸方位は、北-6度-東をなす。柱穴はいずれも直径40~70cm、深さ20~30cmを測る。

4号掘立(第9図) 東西列5.8m 南北列4.0m 間口規模は3軒×2軒と考えられる。主軸方位は、北-44度-東をなす。柱穴はいずれも直径35~60cm、深さ25~50cmを測る。

6号掘立(第10図) 東西列4.2m 南北列2.2m以上 間口規模は3軒×2軒以上(発掘区外の南へ伸びる)と考えられる。主軸方位は、北-4度-西をなす。柱穴はいずれも50~70cm、深さ10~28cmを測る。



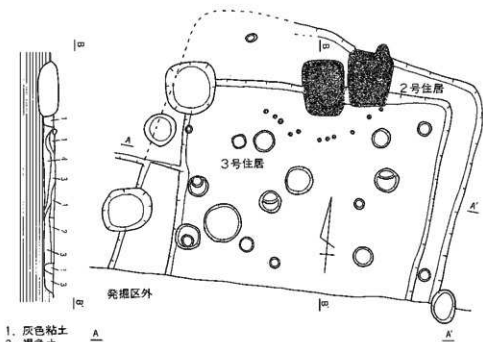
第4図 第一面全体図



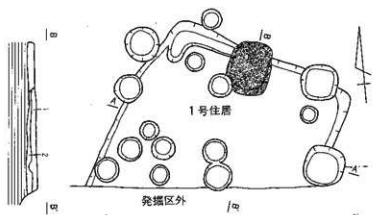
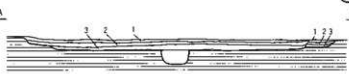
第5図 第二面全体図

レベル=16.00m

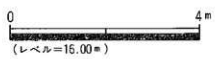
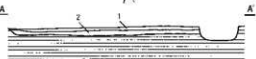




1. 灰色粘土
2. 褐色土
3. 褐色土(砂質)
4. 灰色砂質土

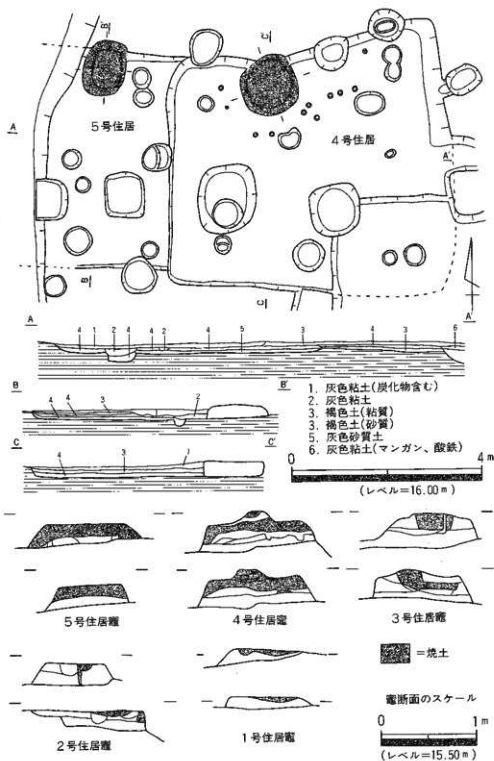


1. 褐色土
2. 灰色砂質土

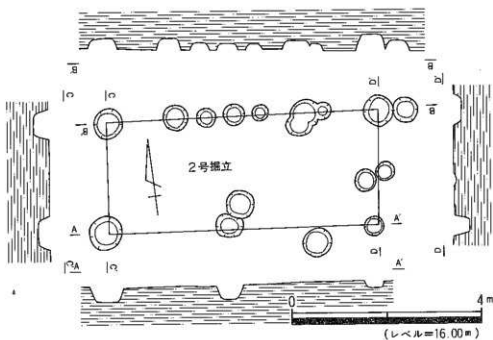
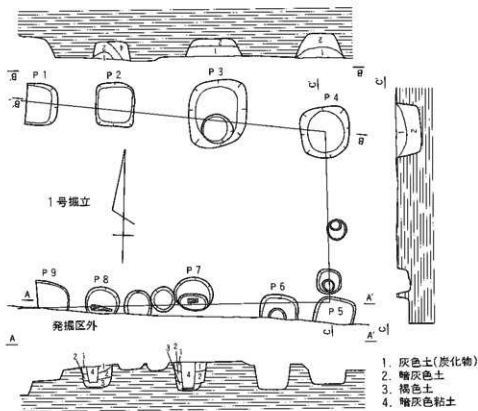


■ = 焼土

第6図 1・2・3号住居実測図



第7図 4・5号住居実測図



第8図 1・2号掘立実測図

7号掘立(第11図) 東西列2.8m 南北列1.4m以上 間口規模は2軒以上(発掘区外の東へ伸びる)×1軒と考えられる。主軸方位は、北-27度-西をなす。柱穴はいずれも20~25cm、深さ5~15cmを測る。

いずれの掘立柱建物も、出土遺物は6世紀前半・後半のものである。奈良初頭期のものも混ざることが量的には微量である。主軸方位、掘り方も含めて概して6世紀に考える。

iii) 溝

2号溝(第5図) 発掘区の北側へ延びると思われる溝の枝溝である。幅50cm、深さ35~40cmを測る。断面U状をなす。覆土には、多量の炭火物が見られ、一時期にその機能を停止し、埋まったものと考えられる。出土土器は、須恵器坏身、土師器坏蓋・坏身・高坏・長頸壺・甕がある。いずれも6世紀前半のものであることから、周辺の竪穴住居と同時期に機能していた溝と考えられる。

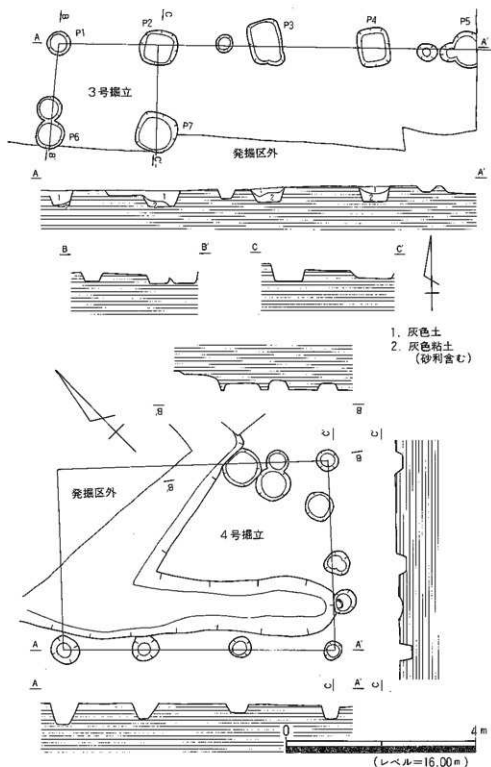
3号溝(第5図) 発掘区を南北に横切る溝である。国道1号線バイパス、59年度調査に連続するものと考えられる。幅250~300cm、深さ40~80cm 断面U状をなす大規模な溝である。5号竪穴住居を切断していた。平面では、確認できなかったが断面で1号掘立柱建物より古い溝である。覆土は、最下層が砂礫を含んだ層でよく流水していたとも考えられるが、中・上層になると次第に粘土質となり、溝の改修が行われなくなってきたことが看取される。出土遺物は、須恵器坏蓋・坏身、土師器坏蓋・坏身・高坏・長頸壺・甕がある。奈良初頭期の須恵器(71~80、85、86)は、重複する大型の1号掘立柱建物の混ざり込みであろう。5世紀代のものもあるが、大部分が6世紀前半の1時期に集中している。従って6世紀の前半を持ってその機能を停止したと考えたい。

7 奈良時代の遺構

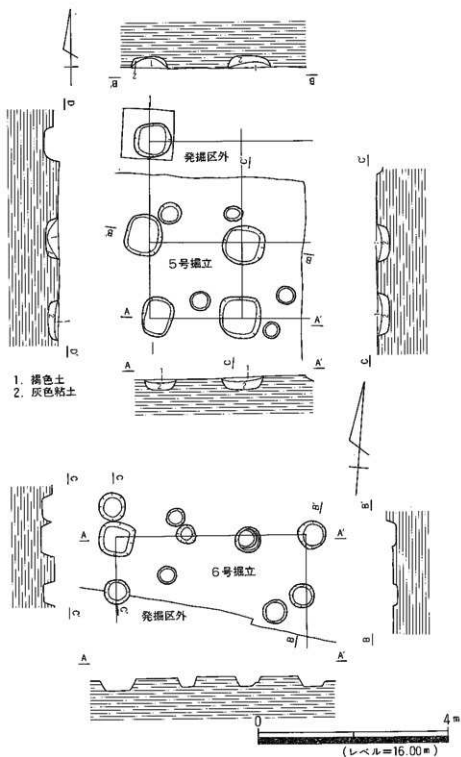
平成3年度の発掘調査により検出された奈良時代の遺構には、掘立柱建物3棟の他、多くの柱穴がある。

i) 掘立柱建物

1号掘立(第8図) 東西列3.5m以上 南北列2.0m 間口規模は、3軒以上(東へ伸びる)×1軒と考えられる。主軸方位は、ほぼ北をなす。柱穴の掘り方は方形で、規模は一边60~70cmと大きい。P7、P8より礎板が出土している。P7より出土した礎板は、長さ20cm、幅8~9cm、厚さ2.5cmを測る、柱の転用材と思われるがきれいな調整をして礎板として利用している。一方P8より出土した礎板は、長さ28cm、幅8~9cm、厚さ3~8cmを測る。礎板利用面のみ調整し、他は柱の形態が残っている。出土土器は、P3より須恵器坏蓋、土師器坏蓋・



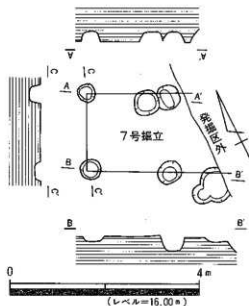
第9図 3・4号掘立実測図



第10図 5・6号掘立実測図

坏身・長頸蓋が、P4より須恵器坏・坏蓋が、P5より土師器高坏・甕が、P6より須恵器盤が出土している。6世紀前半のものを重複する竪穴住居の混ざり込みと考え、奈良時代前半に位置付けたい。

3号掘立（第9図） 東西列4.5m以上 南北列1.0m以上 間口規模は、4軒以上（西へ伸びる）×2軒以上（南へ伸びる）と考えられる。主軸方位は、ほぼ北をなす。柱穴の掘り方は方形で、規模は一辺35～50cm。他の柱穴より小さいP1、P6を建物の底部分と考えたい。出土土器は、小破片で微量である。1号掘立の主軸方向、掘り方等から同時期の奈良時代前半の建物と考える。



第11図 7号掘立実測図

5号掘立（第9図） 東西列1.5m以上 南北列2.0m以上 間口規模は、2軒以上（西へ伸びる）×2軒以上（北へ伸びる）か、2軒×2軒で完結するものと考えられる。主軸方位は、ほぼ北をなす。柱穴の掘り方は方形で、規模は一辺45～50cm。佐野郡衙の雑倉庫の一つと思われる。出土土器は、小破片で微量である。1・3号掘立の主軸方向、掘り方等からやはり、奈良時代前半の建物と思われる。

8 平安時代以降の遺構

平安時代以降の遺構には、溝の他、小柱穴・土壁等がある。

i) 溝

1号溝（第4図） 発掘区東端を南北に横切る溝である。幅20～60cm、深さ5～10cmを測る。Ⅱ層を覆土とし、出土遺物は無い。

9 出土遺物

i) 土器

1号竪穴住居出土土器（12図1～3） 須恵器坏蓋・坏身、土器高坏がある。2の坏身は最大径14.0cm 器高5.0cmを測り、底部の約2分の1を回転ヘラ削り調整する。深いが立ちあがり端部に丸味を持ち、川江編年（川江1976）第Ⅱ期後半（陶器窯TK10併行期）に属する資料と

思われる。

2・3・4号竪穴住居出土土器(12図4~22 第13図23~42) 須恵器坏蓋・坏身・短頸甕・皿、土師器坏蓋・坏身・甕・甗等がある。肩部の稜が消失した須恵器坏蓋(5)と立ちあがり内傾し、6世紀後半に比定可能な須恵器坏身(7)を除き、出土土器は大きく6世紀前半代と奈良時代の2時期に分けられる。

6世紀前半に比定される資料の内、4の須恵器坏蓋は口径15.0cm 器高3.9cmを測り、天井部の約2分の1を回転ヘラ削り調整する。口縁端部を丸く仕上げ、内面に1条あわい凹線を巡らす。川江編年第II期後半の資料と思われる。指頭痕が目立つ土師器坏蓋・坏身(8~16)はすべて須恵器の模倣品で、口縁部内外面にナデ調整を施している。口縁部・立ちあがりの高さ、その内傾する度合い、肩部・蓋受けの稜線の強弱に差が認められるが、ほぼ同時期の資料と考えられる。17は短脚を環接合する高坏、甕には底部を直線的に納めたものと尻づまりに仕上げたものがある。甕にも2形態が見られ、長胴・丸底をなす19・20は頸部を明瞭に屈曲させ、胴部外面に縦位のハケメ、胴部内面・底部には横位のハケメを施す。口頸部を緩やかに外反させ、端部を内湾気味に仕上げた薄手の甕(21・23~27)の胴部形態はよく判らない。22・28は奈良時代に属する可能性がある。

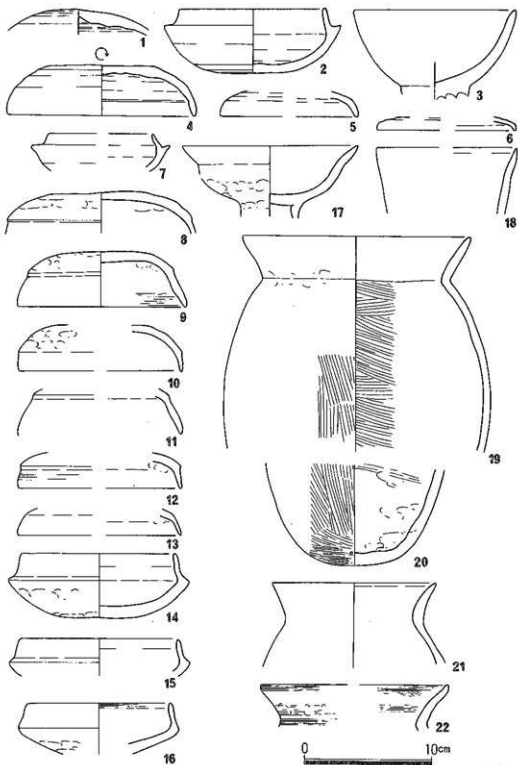
奈良時代に比定される須恵器坏蓋の口縁部形態には端部を外に伸ばすもの(32)と内方まで屈曲させたもの(29~31)の2種が見られ、前者は奈良時代前葉の、後者は中葉以降の形態と考えられている。底部中央を下方に張り出す有台坏身(33)は外反する口縁部形態、また高台の接合位置が若干内方に移行している点、中葉以降まで降る資料と思われる。39は奈良時代後半に顕著となる盤状の須恵器皿である。

奈良時代に属する資料がこれら竪穴住居跡群と重複する他の遺構(溝・掘立柱建物等)に伴っていたものとすれば、2・3・4号竪穴住居はほぼ近似して6世紀前半代に形成されたと見て大過ないように思われる。

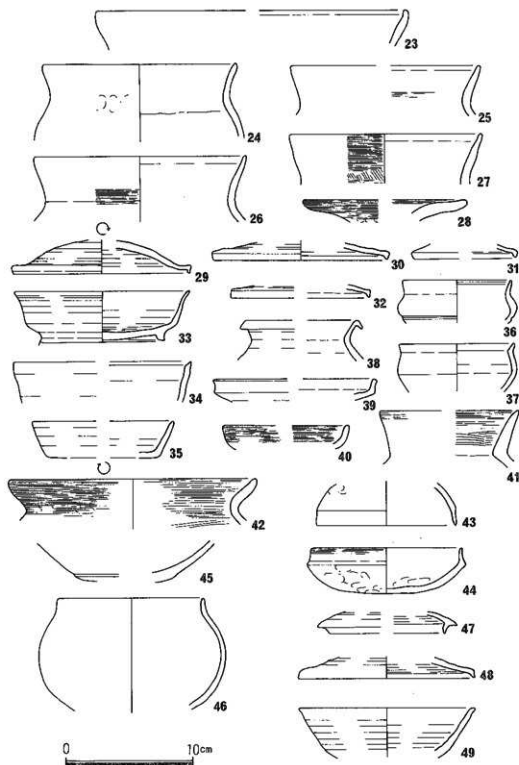
1号掘立柱建物柱穴出土土器(13図43~49 第14図50~53) 須恵器坏蓋・坏身、土師器坏蓋・坏身・短頸甕・付台甕等がある。身受け部を作り出した須恵器坏蓋(47)は7世紀後半に比定され、須恵器を模した土師器坏蓋・坏身(43・44)と46の短頸甕・50の付台甕は重複する4号竪穴住居に伴うものと考えられる。坏部に段を有する土師器高坏(45)はさらに時期の遡る資料である。

口縁端部をわずかに下方へ屈曲させた須恵器坏蓋(48)、ノタメの顕著な碗状の坏身(49)、底部中央を高台より下方まで張り出した有台坏身(52)は奈良時代前葉の特徴的な形態であり、1号掘立柱建物の形成時期を示す資料と考えている。

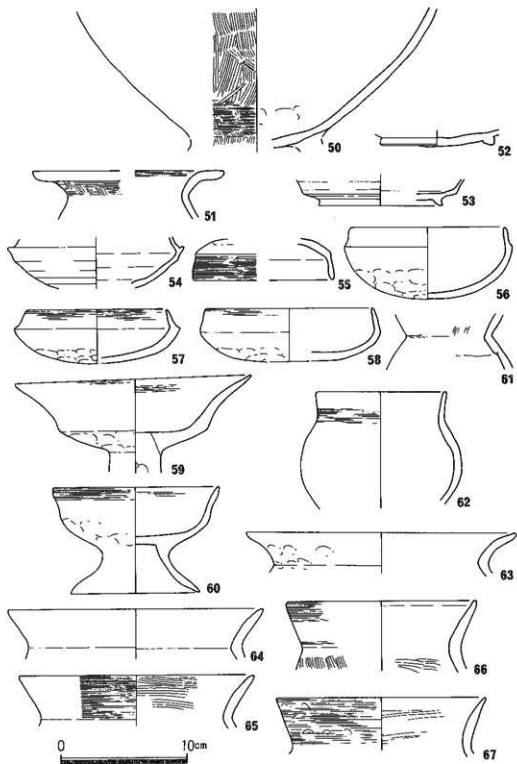
2号溝出土土器(第14図54~68) 須恵器坏身・土師器坏蓋・坏身・高坏・短頸甕・甕等がある。須恵器坏身(54)は大形であるが(最大径14.2cm)、立ちあがりは内傾し低い。川江編年



第12图 1・2・3・4号竖穴出土土器实测图



第13圖 1・2・3・4・5号竪穴 1号掘立出土土器火測図



第14图 1号掘立 2号沟出土土器实测图

第Ⅲ期中葉(陶器窯TK43併行期)に比定できる。土師器環蓋・坏身(55~58)は最大径14cm前後を測り、口縁部・立ち上がりの高さから判断して6世紀前半代の須恵器を模したものと考えられる。高坏には脚部をソケット状に坏部に差し込んだ59と環接合した60の2形態が見られ、前者は坏部を持つ5世紀代の形態を踏襲している。甕には長胴甕の破片が目立ち(64・65・67・68)、口縁部外面にナデ調整、胴部外面に縦位のハケメ、内面には粗い横位のハケメを加える。

2号溝の機能していた時期は6世紀前半~中葉と判断される。

3号溝出土土器(第15図69~96 第16図97~117 第17図118~130 第18図131)すべて破片であるがもっとも多くの上器が出土している。器種には須恵器環蓋・坏身・甕、土師器環蓋・坏身・高坏・長頸甕・短頸甕・甕・甕等がある。

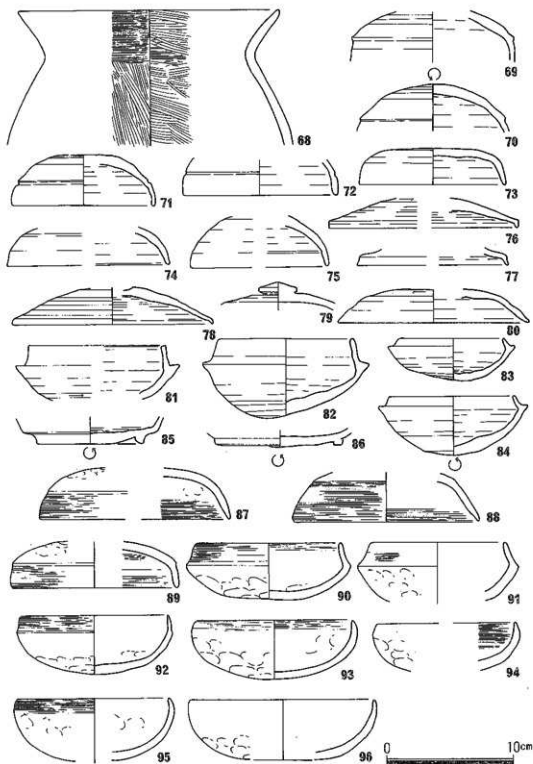
須恵器環蓋・坏身(69~84)には時期の異なる資料が混在している。天井部の約5分の4を回転へう削り調整し、四部の稜に鋭さを残す須恵器環蓋(69)や立ちあがり端部を平坦に内傾させ蓋受けの作りがシャープな81の坏身は、川江編年第Ⅰ期(陶器窯TK208~TK47併行期)の資料と思われる。70の坏蓋の時期も遡る可能性がある。立ちあがり端部に丸味を持つ坏身(82)は川江編年第Ⅱ期後半(陶器窯TK10併行期)に、その他口径・最大径が12.5cm~10.5cmをなす環蓋・坏身(71~75・83・84)は6世紀後半~7世紀初頭に位置づけられる。奈良時代に位置づけ可能な環蓋(77~80)の口縁端部の折り返しは外方に開いており、79のツマミも扁平・大形である。底部中央が下方に張り出す有台坏身(85・86)を含め、すべて奈良時代前葉の資料と考えられる。須恵器大形甕(図版6)は最大径60.0cm 器高78.0cmを測り、口縁部に連続刺突文を施す。

土師器環蓋は須恵器の模倣品のみが出土し、6世紀前半の資料と思われる。坏身にはこれら模倣環蓋と対になる須恵器の模倣品(87~89)と碗状を呈するものがあり、後者はさらに口縁部を内湾させるもの(93~96)と半球状のもの(97~104)に大別される。指頭痕が目立ち、口縁部内外面に顕著なナデ痕を残している。口縁部を内湾させるものは6世紀前半に位置づけられ、半球状のものの内大形品もこの時期まで遡る可能性がある。平坦な底面を持つ105・106は7世紀以降まで降る資料である。

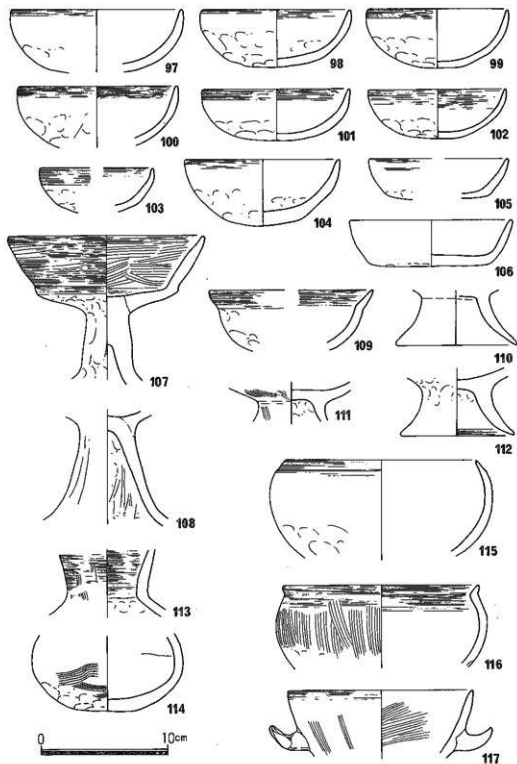
高坏には長脚をソケット状に差し込んだ107・108と短脚を環接合した109~112の2種が認められる。107は坏部に明瞭な段を残し、坏部内面をハケメにより調整している。5世紀代に位置づけられる。他は6世紀前半代の資料と思われる。

113・114はいわゆる古式土師器の形態を踏襲した長頸甕、116の短く外反する口縁部は5世紀代の坏身に共通する形態である。甕(117)の把手は細長く浅い。甕(118~131)はバラエティーに富み、118は5世紀の、131は台付甕と考えられる。長胴甕の破片が目立ち、多くが6世紀前半代に位置づけられる。

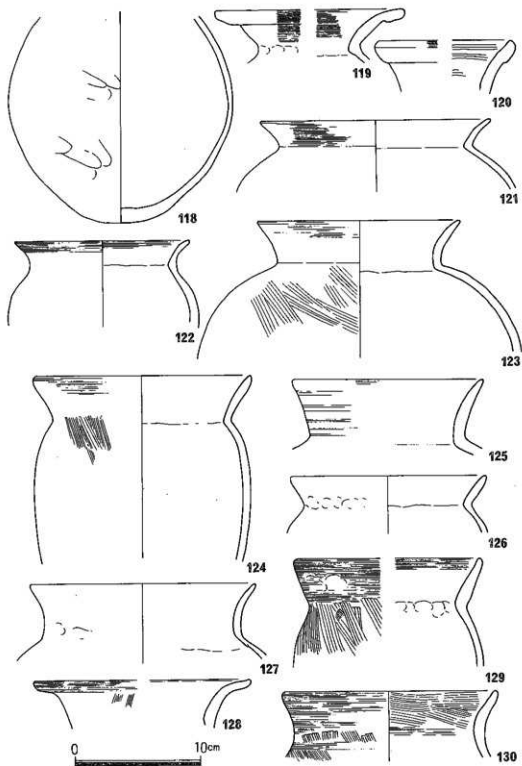
奈良時代に属する資料は重複する1号掘立柱建物に伴うものと思われる。5世紀・6世紀後半~7世紀代の資料を含むが、出土土器の主代は6世紀前半代にある。



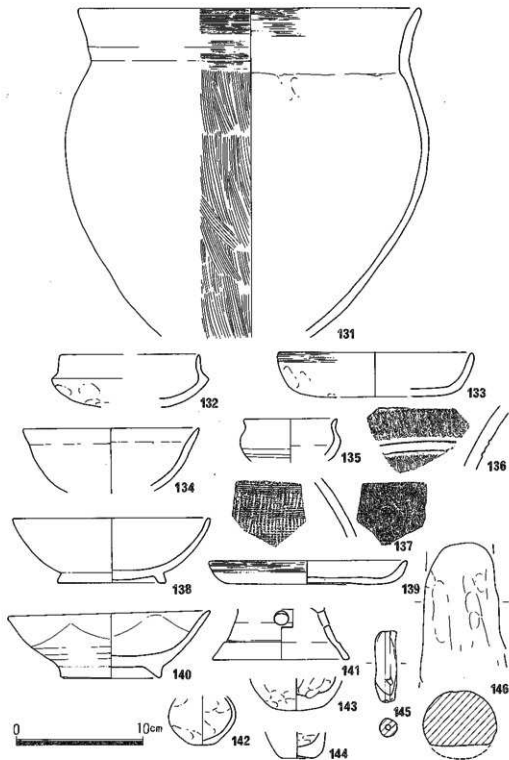
第15图 2号溝 3号溝出土土器実測図



第16图 3号满出土土器实测图



第17图 3号满出土土器实测图



第18図 3号溝 2・3・4号竪穴 その他の遺構 包含層出土土器実測図

その他の遺構・包含層出土土器（第18図132～141） 132～134は堅穴状遺構（012）から出土した土師器で、6世紀前半の須恵器模倣坏身・短脚環接合高坏と7世紀以降の坏身がある。G3区Ⅲa層から出土した138の須恵器有台坏身は緻密な胎土を持ち、ていねいな回転ナデ調整を加えている。あるいは金属器を模したものかもしれない。その編年時期は判らない。140は12世紀前半の渥美湖西産の山茶碗である。

ii) その他の遺物（第18図142～146）

壺・坏型の手捏ミニチュア土器（手捏土器）と管状の土錘・土製支脚がある。古墳時代の遺物であろう。

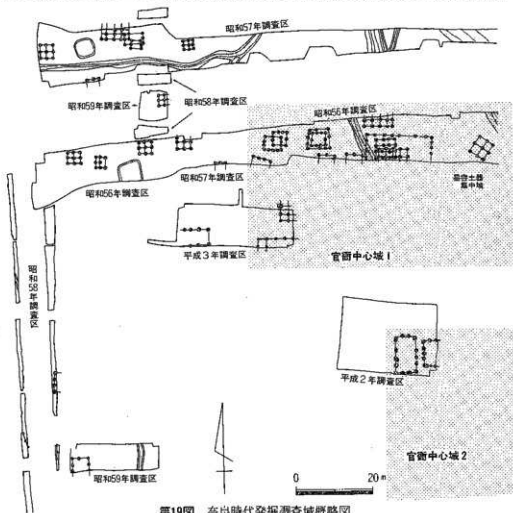
10 ま と め

平成3年度の発掘調査により検出された遺構と、過去周辺域で調査された遺構とを関連づけて、調査のまとめとしたい。

i) 古墳時代 今回の発掘調査により検出された堅穴住居の新旧関係は、5号住居→4号住居→2号住居→3号住居である。いずれも出土土器から6世紀の前半に位置付けられる。1号堅穴も同時期である。検出された全ての堅穴住居に北向きに竈が検出された。また、包含層から2個体の土製支脚も出土した。昨年、調査された敷瓦遺跡（メロンハウス建設に伴う）内でも、6世紀前半の竈付きの堅穴住居が検出された。かつて浜松市伊場遺跡で6世紀初頭（陶器窯TK47併行期）の竈付きの堅穴住居と3本の土製支脚を用いた竈状施設が確認されている（浜松市教育委員会1987）。平成2年度検出の3軒の堅穴住居（平成2年度1・3・6号住居 袋井市教育委員会1991）と、今回の事例も含め、遠江における竈普及の時期を6世紀前半と考えうるなら、竈の発生時期及び普及期を少し遅らせる必要があるのではないだろうか（掛川市六ノ坪遺跡では、5世紀後半の堅穴住居に竈が認められている）。

国道1号線バイパス、今回の発掘調査地周辺が6世紀代における集落の中心域の一つと考えられる。今回の発掘調査区（300平方m）内だけでも、4軒の重複する堅穴住居が検出されており、立て替えが行なわれていたことがうかがえる。発掘区北側の岡1バイパスの調査では、堅穴住居が重複しすぎており堅穴住居として検出できなかったものさえある。平成元～2年度にかけて行なわれた「大和ハウス中部工場」内調査では溝に囲まれた掘立柱建物を中心とする6世紀後半の集落が検出されている。大和ハウス工場内で見られた堅穴住居と掘立柱建物のセット関係の成立が6世紀前半代まで遡るとしたら、今回の発掘調査区で確認された1号住居と7号掘立柱建物、2～5号住居と2・6号掘立柱建物のセット関係が考えられる。いずれ主軸方向がほとんど一致し、隣接地にある。こうした状況から古墳時代の坂瓦遺跡では、6世紀の前半、すでに集落内で共同で掘立柱建物を利用する状況から、家（血族）を中心とした単位で堅穴住居を生活の場とし掘立柱建物を倉庫的に利用するようになっていたのではないだろうか。

ii) 奈良時代 坂尻遺跡の奈良時代とえば、佐野郡衙遺構について触れざるをえない。過去の周辺域で行なわれた調査の概略(第19図)から官衙遺跡の推定を立ててみたい。今回の発掘区内から奈良時代初頭と思われる建物が3棟検出された。いずれも主軸をほぼ北にする。掘り方の規模も50~70cmと大きい。図1バイパスの調査で、大型掘立柱建物が集中する地区が発見されており、今回の調査区を含め、官衙中心域と考えられる(第19図=官衙中心域1)。今回発掘区の北西に位置する場所で倉庫群が発見されており、ここをある時期の正倉と考えてもさしつかえあるまい。もう一つの考えとして、坂尻遺跡で出土する駅家関係の墨書土器の問題がある。中心域1は、大型の掘立柱建物は集中するが、規則性にはなはだ欠ける。そこで、昨年メロンハウスに伴う発掘調査により発見されたL字形配置の大型掘立柱建物の存在である。ここを本来の官衙中心域(第19図=官衙中心域2)と考え、前述の中心域1を駅家関係の建物群と見ることもできる。坂尻遺跡を官衙と考えるにあたり、東海道という陸上交通と原野谷川という水上交通の働きを無視するわけには行かない。官衙中心域1より、官衙中心域2の方が東海道、原野谷川に隣接している。官衙の表玄関が交通の利便性から設定されているとしたなら中



第19図 奈良時代発掘調査域概略図

心域2周辺に郡家があったとしてなんら問題はないであろう。

また、今回の調査で検出された棟方位をほぼ南北に向ける掘立柱建物群(1・3・5号掘立柱建物)の形成時期は奈良時代初頭(8世紀前半)と判断でき、平成2年度検出のL字配置を持つ2棟の掘立柱建物、官衙中心域1(第19図)の掘立柱建物とともに、佐野郡家設置期は、整然とした建物配置だったのではあるまいか。

官衙建物を考える場合、遠江国においてどの程度律令体制が浸透していたかも検討する必要がある。律令体制が敷かれ、初めて建てられた官衙遺構は規則性があり、その後の建て替えでは、その規則性が崩れていったことも十分考え得る。律令体制が崩れ始める8世紀後半、果たして奈良政権の力が遠江においてどれだけ拘束力を持っていたのだろうか。

いずれにしろ、今回の発掘調査を含め確実に官衙域内の施設であるという証拠は未だ発見されていない。今後の発掘調査の成果に期待したい。

参 考 文 献

- 財団法人静岡埋蔵文化財調査研究所 1989 『坂尻遺跡—昭和63年度袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報—』
- 川江秀孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器—古代陶質土器—の編年』 静岡県考古学会
- 浜松市教育委員会 1987 『伊場遺跡発掘調査報告書第6冊 伊場遺跡建物編4』
- 袋井市教育委員会他 1984 『一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報—坂尻遺構第4次調査—』
- 袋井市教育委員会他 1984 『坂尻遺跡—県道掛川袋井線道路改築工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 袋井市教育委員会他 1985 『坂尻遺跡—古墳時代、奈良時代、中世・平安時代、自然科学編』
- 袋井市教育委員会 1985 『坂尻遺跡—昭和59年度緊急発掘調査概報』
- 袋井市教育委員会他 1986 『坂尻遺跡昭和60年度一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989 「2.坂尻遺跡」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 年報V』
- 原秀三郎 1983 「律令制下の袋井市域」『袋井市史通史編』
- 原秀三郎 1986 「古代の袋井」『目でみる袋井史』
- 古岡伸大 1982 「坂尻遺跡」『日本考古学年報』35
- 袋井市教育委員会 1990 『坂尻遺跡—シノムラ化学工業株式会社事務所の増築工事に伴う発掘調査概報』
- 袋井市教育委員会 1990 『坂尻遺跡—平成2年度メロンハウス建設に伴う緊急発掘調査概報—』

写真図版



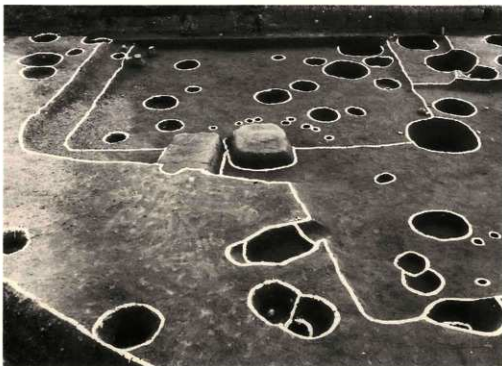
第1面完掘状況 (西より)



第2面完掘状況 (西より)



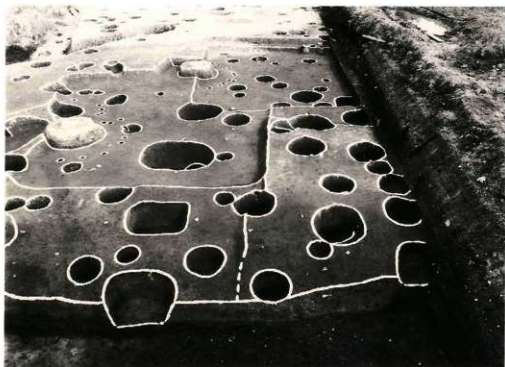
2・3・4・5号竪穴住居（北より）



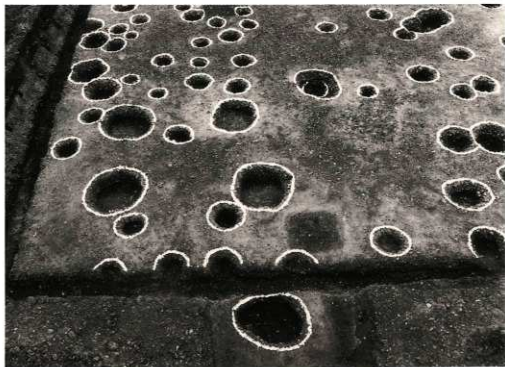
2・3号竪穴住居（北より）



4・5号竪穴住居（北より）



1号掘立柱建物（西より）



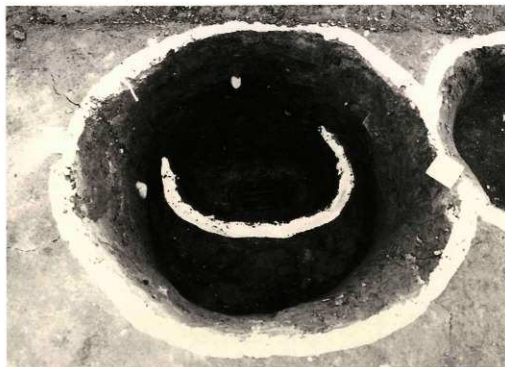
5号掘立柱建物（北より）



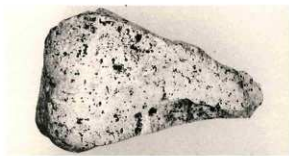
1号竪穴住居 2・6号掘立柱建物（東より）



3・7号掘立柱建物（北より）



1号掘立P7礎板検出状況（北より）



3層出土砥石



3号溝出土土師器甕(124)



2・3・4号竪穴住居出土土師器坏蓋(8)



3号溝出土須恵器坏蓋(74)・坏身(82)



3号溝出土須恵器大形甕口縁部



2号溝出土土師器高坏(60)



3号溝出土須恵器大形甕



2号溝出土土師器甕(68)

出土遺物

坂 尻 遺 跡

—平成3年度貸倉庫建設に伴う
緊急調査概報—

1992年 3 月 3 1 日

発 行 静岡県袋井市教育委員会
〒437 袋井市新屋一丁目1番地の1

印 刷 株式会社 関 明 堂
〒430 浜松市中沢町1-1